

ワーホリ娘から聞いた スイスの農業

昨年、トマム・スキートリゾットで有名な北海道・占冠出身の伊藤志織（本誌10年11月号リーダーズスクエア掲載）が働いていたが、彼女からは多くのことを学んだ。彼女は大学卒業後、ニュージーランドに半年、その後ワーキング・ホリデー（以後ワーホリ）の制度を使い、数回スイスと日本を行き来する生活をしている。簡単に書けばそれだけのことだが、使われているそれぞれの単語には深い意味がありそうだ。

まずワーホリについて、協会では「観光ビザ、留学ビザ、就労ビザとは異なり若者向けの特別な渡航のためのもの」とある。極端な考え方をすれば、現地に着いてから行きあたりバッタリの生活を過ごすことが出来るはずよ、ということなのか。

自分もそうだったが、現地到着後、金髪・ブルーアイと、どのような出会いがあるのか、頭の中が心穏やかでは決してあり得ない日々を過ごすことや、後先考えずにやりたいことができるのが青春なのだろう。

しかし最近のワーホリ経験者たちから聞くと、ほとんどは渡航前にある程度の生活手段を考えていて、現地到着後、路頭に迷うことはないそ

うだ。そして協会のホ

ームページにはワーホリ参加者が「用意した

お金は所持金、送金合わせて12.1万にアル

バイト収入43万の合計164万円が平均」と

ある。日本はとりあえず金銭的には豊かな国である証明だ。受け入

れ国にしても貧しい国よりも豊かな国の若者

が来てくれた方が良いのかもしれない。考え

方を変えればポケットになけなしのドルを忍

ばせ、現地に到着後、

一旗あげようなんて考える者が少なくなったの

う。

一度このワーホリで行くと、また

行きたくなる若者が多いのも事実の

ようだ。つまりワーホリで本当のワ

ーホリ（ワーキング・ホリック、中毒）

になるのか？ この制度では一生に

一度その対象国に行けるとあるが、

やはり世の中にはこの制度を最大限

利用できる裏技もあるようだ。たと

豊かであること、 豊かになること

Vol.35



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

ヨーロッパ・シエンゲンビザ加盟国に入国後ドイツに行っちゃえば、もちろん違法ではあるが、受け入れ側さえOKであれば、再びドイツの金髪・ブルーアイに出会うことが出来る。

世の中にはワーホリデビューする娘がいる。日本にいた頃は人の目もまともに見ることができなかった少女が帰国後、ド派手になって、ハァロ♡状態にさせる国の一番がオースト

オレにも 言わせる!

北海道長沼発
ヒール宮井の憎まれ口通信

ラリアらしい。南のメルボルン、タスマニアではこの手のデビューは少ないが、北のゴールドコーストに半年もいると、小泉今日子びつくりの**大和撫子七変化**とか。

寒い国スイス帰りで、私の農場で働いた彼女は真面目な女性だが、ジヤニーズ系には小さい頃から興味は全くなくて、派手でなく、寡黙なスイス人の金髪・ブルーアイ好きなのは私と同じである。やはり「類は友を呼ぶ」という先人からの言い伝えに間違えはなさそうだ。

たとえばTVや映画の米国人は気さくで、いつも明るいと思われがちだが、それは一部のハリウッドがあるサザン・カリフォルニアではそうかもしれないが、私がよく行く、ミネソタあたりでは全く逆の状態、つまり無口で積極的に視線を合わせようとしなない。派手な動作もなし。同じ米国人でも全く別人種のように思われる。もう数十回米国に行ったが同じ金髪・ブルーアイでもやはり北の方が好みなのは気候や雪景色が同じだからなのか。

彼女の話によると、スイスはやはりお金のある国のような。働いていた農家は典型的なアルプスの少女ハイジが出てきそうな牧歌的な山あいに、搾乳牛が6頭で、半分は自分たちでチーズなどに加工して販売、残

り半分は生乳用として熱処理をしないで地域に販売している。聞いて一番驚いたのはトラクターがないことだ。牧草刈りや収穫は大ナタのアームパワーのみ。ファーム・インをやりながら収入の半分は政府からの直接所得保障がある。車はかなり古いエアコンなしトラックが一台あるのみ。標高が高いので、さぞかし燃料消費と排出ガスには悩んでいるのだろう。そしてこれが本当の有機農業、地産地消で心清らかな生活に思われるが、政府からの直接所得保障がなければ、どこかの東南アジアかアフリカの**途上国**の生活と変わらない。

豊かでない昨日を 繰り返せしたとウソで……

ここでみなさんに考えていただきたい。スイスの様な金がある(集まる)国でマーケットがあれば、このような農業や有機栽培ビジネスは成り立つ。だが、タイや中国では、有機農産物を作っている企業は慣行栽培も普通に行なっている。さらに、農業をまともに購入して使えない国、北朝鮮やラオスの野菜は有機栽培でありながら、日本で扱われさえしない。その理由は何なのか。

「日本も昔は有機栽培しかなかった」なんてことを言う人達も多いが、国が貧しい時は選択の余地

がなかっただけで、豊かな国になれば選択方法が増える。決して有機栽培の有利性が証明された訳ではない。なのに、実際に貧しい国からは買おうとはしない。人間としてのいやらしさが見え隠れするように思う。慣行栽培であれば中国産も米国产も同じに扱われる。だが皆さんは有機栽培で同じ価格の場合、カリフォルニア産とベトナム産のレタス、実際どちらを購入するだろうか?

有機栽培の農産物がビジネスとして成り立つためにはマーケットのほかに社会資本が必要にもなる。電話、舗装された道路、きれいなトイレ、読み書きができる労働者、ワイロが必要ではない通関システムなど……。日本では当たり前でも、豊かではない国からの有機栽培農産物が日本にほとんど存在しない理由はそこにあるのだろう。

英国のドルはある一定の条件のもとで野菜に価格変動があった場合、生産者に価格補てんをしていると聞く。日本でも一部の野菜に農水省のありがたい予算で同じようなシステムがあるが、流通会社で積極的に行なっていると話す話を聞かない。そう考えると、日本は本当に成熟された社会なのだろうか?と疑問もある。

ところで、豊かさとは何だろうか?

答えの一つに単純に米国の豊かさを見習うべきであろう。単純に物がたくさんあり、有機を選ぶかマクドナルドを選ぶかの**選択の自由**がある社会はやはり魅力だ。間違っても選挙権がない中国やビックマックが存在しないベトナムではない。

豊かになるためにはどうすればいいか? 簡単だ。豊かではない昨日と同じことをやらないことだ。やっていたら同じ結果になるだけだ。

小さなマーケットだが、できあがった社会資本、近隣諸国との所得格差がないので、スイスの農家が生き延びていくことは可能なのだろう。

豊かな国でなければ第二次世界大戦の時にようにナチスもやってこない。スイスは100年ほど前までは決して豊かな国ではなく、男達は冬になると他国のための傭兵になった。今でもスイスの一般家庭には米軍がアフガンで使う5.56mmよりも強力な7.62mm小銃を置いてあり、年に数回の訓練も義務化されている。それに比べ日本人は……。

日本はすべて話し合いで国際紛争が平和的に解決できると考えているから、今ひとつ豊かになれないのだろう。たとえ小銃を所持していてもアルプスの少女ハイジに出てくる優しい、元傭兵のじいさんのようにもなれるかもしれないのに。